

Go と「行く」

——志向性の観点から——¹⁾

出 原 健 一

0. はじめに

池上（1981）で提唱された「する」的な言語と「なる」的な言語という区分は、認知言語学の重要な概念の1つである「(事態)把握 (construal)」と関連づけられて、現在でも活発に議論されている。本稿では、このような近年の議論を踏まえた上で、英語の go と日本語の「行く」を、出原（2007）で提唱した多重活性化モデル（Multiple Activation Model, 以下、MAM）を用いて比較し、違いを確認することで、日英語の志向性の発生源を探っていくとともに、MAM ではこのような差異も明示的に示すことができることを明らかにしたい。

1. 「する」的な言語と「なる」的な言語

池上（1981）は、英語では〈場所の変化〉の動詞が〈状態の変化〉に転用される傾向があるのに対し、日本語では〈状態の変化〉を表す動詞が〈場所の変化〉を表すのに転用されることがあることなど、両者の対立的特徴を指摘した上で、英語を「する」的な言語、日本語を「なる」的な言語として位置づけた。上記の通り、これに関わる議論は膨大で、概観することさえとてもできないので、ここでは本論に関連のある特徴のみ言及する。

「する」と「なる」の対立は、他の対立的特徴とも有機的に結びつく。これ

1) 本稿は、2008年11月29日に行なわれた日本言語学会第137回大会ワークショップ『英語と日本語の好まれる事態把握—〈結果志向〉と〈過程志向〉の動機づけ—』の中で発表した「『志向』はどこから来るか—Go と「行く」の事例—」のハンドアウトを加筆修正したものである。

について、花崎（2008：29）は、以下のようにまとめている。

〈出来事自体〉を描写するということは、出来事がどう〈ナル〉あるいはどういう〈経過〉をたどってその出来事が起こるかを描写することであり、出来事であるので境界線がはっきりしない〈無界〉的描写といえるであろう。一方、動作主・被動作主の対立でとらえるということは、そこに〈因果関係〉を認め、動作主が何を〈スル〉のかに注目し、何かをした〈結果〉を重視し、そして、動作主・被動作主という個体を表すのであるから〈有界〉的な描写となるわけである。

ここで注目したいのは、「なる」的な言語では「経過」を、「する」的な言語では「結果」に注目しやすいということである。これを示す例として、池上（1981：266）は（1）の例を挙げている。

- （1）a. 燃ヤシタケレド、燃エナカッタ。／沸カシタケレド、沸カナカッタ
 b. *I burned it, but it didn't burn. / *I boiled it, but it didn't boil

「燃える」と burn, 「沸かす」と boil は一見同じようだが、日本語では結果まで意味していないのに対し、英語では結果を含むので、（1 b）は非文となる。そして、他の例を検証した上で、以下のように結論づける。

対応する「行為の動詞」で日本語と英語の間に意味的な差が認められる場合、図式的に言くと、日本語の動詞は〈行為〉の表示のみにとどまるのに対し、英語の動詞は〈行為〉＋〈結果の達成〉を表示するということになる。（同上：268）

本稿ではこの特徴を「過程志向」と「結果志向」と呼ぶことにする。

以上を前提とした上で、次章以降で go と「行く」を、MAM を用いて比較する。

2. Go の意味構造

本章では、go の意味構造を MAM を用いて論じた出原（2007）を概観する。MAM はコネクショニズムの考え方に基づいた意味記述方法で、複数の意味属性（semantic attribute）を設定し、その重みづけ（結合強度）と活性度（出力強度）によって語の意味を記述するというものである。英語の移動動詞 go の場合には、2つの意味属性が考えられる。1つ目は、話し手の領域からあるモノ（トラジェクター）が離れていくという属性である。これは go の意味として最も根幹をなす意味属性と経験的に考えられるので、第1属性（Primary Attribute）と言えるだろう。そして2つ目として、話し手以外の領域のある地点に到着するという属性がある。これを第2属性（Secondary Attribute）と呼ぶことにする²⁾。この2つの属性を組み合わせたものが go の意味構造となる（図1）。

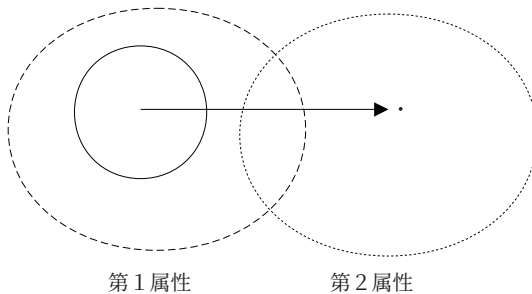


図1

円はグラウンド（G）、矢印はトラジェクターの移動、点は到達点を表す。点線は2種類あるが、これは結合強度の違いを示している。第1属性の方が第2属性よりも重みづけが強いことを点線の濃さを変えることで示している。これを基として、その時々活性度の違いによって様々な意味が発生すると考え

2) 出原（2007）では、第1属性を「属性a」と、第2属性を「属性b」と呼んだが、本稿では、属性の重要度が明確に分かるように用語を変更した。

るわけである。そこでまず、基本的な意味と考えられる空間移動を表しているものから見ることにする。

- (2) a. My pen's gone; who's taken it? (L. 34)
 b. Our train went at 2. 25. (C. 1. 2)
 c. Go down this street one block and turn to the right. (G. p. 551)
 d. I've got to go to the bathroom. (G. 1a)
 e. Does this bus go to Pattington? (G. 1a)
 f. This sofa will go nicely over there. (W. 20)
- (L: Longman, C: Collins COBUILD, G: ジーニアス英和辞典, W: ウィズダム英和辞典)

(2) はすべて空間的意味を表していると言えるが、活性度が異なる。(2a) はトラジェクター (My pen) が話し手の領域から離れたことを意味しており、一般的な言い方をすれば、その到達点は背景化されている。これは第1属性が相対的に最大に活性化している³⁾例だと言える。(2b, c) となるにつれ、第2属性の活性度も強くなり、(2d) では両属性が十分に活性化している。(2e) になると、相対的に第2属性の活性度が強くなり、(2f) は第2属性が相対的に最大に活性化している。つまり(2) ではaに近いほど第1属性の活性度が相対的に強く、fに近いほど第2属性の活性度が相対的に強くなるということになる。ただし、(2a) と(2f) はgoのプロトタイプ性から言えば対等ではない。(2a)の方が、使用頻度、言語発達の初期の例、言語直感から考えて、明らかにプロトタイプの事例である。したがって、第1属性の方に結合強度(重みづけ)を強く設定しておく必要があるのである。

ここまでは空間的・具象的意味に限定して見てきたが、抽象的意味に関しても、図1の構造を基本的には継承して、比喩的拡張が行なわれると考えられる。具象的とも抽象的とも判断できるような事例の使用を経て、(3)-(5)などの

3) 「相対的に最大に活性化している」とは、第1属性が最大限活性化されているのに対し、第2属性がほとんど活性化されていない状態を指す。

抽象の意味が生まれる。

- (3) a. Has your headache gone yet? (L. 34)
- b. Dad's sight is starting to go. (L. 36)
- c. Now that his wife's gone, he's all on his own. (L. 37)
- (4) Everything is going well with our plan. (G. 5a)
- (5) a. go bad, go bankrupt, go blind, go mad, go sour
- b. go armed, go hungry, go in rags, go naked, go thirsty

(3) は第1属性が相対的にかなり活性化している例である。「痛みが消える」「視力を失う」「死ぬ」ことを go で表現しているが、日本語でも同様に「行く(逝く)・なくなる(亡くなる)」と表現できることは注目に値する。(4) は両属性とも活性化している例である。そして、(5a) は「～になる」、(5b) は「～である」という結果的意味を表しているので、一見第2属性だけが活性化しているように見えるが、この事例はよく言われるように正常な(良い)状態から正常でない(悪い)状態への変化、もしくはその結果状態を表現していることから、第1属性(正常な状態から離れる)もある程度活性化していると言える。ただし、結果を表している以上、第2属性の方が相対的には活性度が強いことは間違いなからう。これに関しては、3.2で詳細に検討する。

以上のことから、図1の意味構造が抽象的領域に写像されても、基本的に維持されていると言うことができる。つまり、goの意味をすべて図2の中に位置づけることが可能である。

この go の意味構造を基準として、以下で「行く」の意味構造、及び go と「行く」の比較を行なうことにする。

***G_o*の意味拡張**

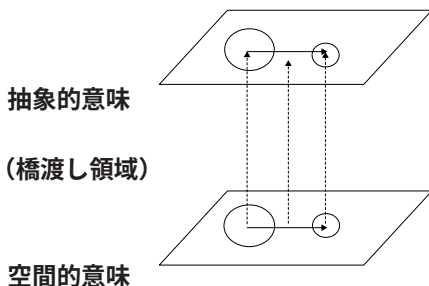


図 2

3. 「行く」の意味構造—go との比較から

本章では、「行く」の意味構造を考える。ただし、紙面の関係上、詳細な分析はできないので、go と比較した上で、本稿の目的に関連して興味深い相違点を2点だけ取り上げることにする⁴⁾。

3.1 補助動詞の使用

池上(1981)ですでに指摘されているが、英語では go を使う必要がない場合でも、日本語では「～ていく(てくる)」を用いた方が自然という事例が多く存在する。

- (6) He ran to the house.
- (7) a. A 氏の車が今あなたのお宅へ移動中です。
b. A さんの車が今あなたのお宅へ向かって行ったわ。

4) 移動動詞の日英対照研究では、go と「行く」よりも come と「来る」に重きが置かれることが多い(上原2001, 中澤2008などを参照)。これは前者ペアよりも後者ペアの方が言語間の差が現れやすいからであろう。その意味では、前者ペアは基本的に似た意味構造を持っていると考えられるので、本稿のように数少ない相違点だけ取り上げた比較も、それほど乱暴な議論とはならないと判断した。

c. もうすぐあなたのお宅へ来ますよ。

(森田2002 : 233)

(6) はその一例であるが、和訳した場合、「彼は家に走った。」よりも「彼は家に走って行った (走って来た)。の方が自然である。前者は非文ではないが、ややレトリック的である。(7) を見るとそれはさらに明らかになる。(7 a) は「警察か報道関係者が相手に報告している言葉のようで、ただ正確に状況を伝えるだけの無味乾燥な日本語」(同上) と言えるのに対し、(7 b, c) は日常会話で自然に出てくる文である。これは、英語に比べて日本語では、話し手が記述される内容の中に入り込み、その視点から表現される傾向があることを示している。話し手は、(7 b) では起点 (もしくは経路の途中) に、(7 c) では到達点 (「あなたのお宅」) に自分を位置づけて、そこからの視点で言葉を作り上げている。このような日英語の傾向は (8) でさらに顕著となる。

(8) a. The {wall / castle wall / fence} |goes / runs / passes / *proceeds| through the center of the field.

b. *その {〈ベルリンの〉壁／城壁／フェンス} は野原の真ん中を |行く／走る／通る／進む／通っている／走っている|。

(田中・松本 1997 : 219)

英語では (8 a) のように実際に人の移動が不可能な場所が主語になっても移動動詞と共起しやすいが、日本語では「高速道路は大阪から東京まで走っている」というように、その場で実際に人が移動できる場合は用いることができるが、そうでない場合は (8 b) に見られるようにかなり不自然である。

また、このような対比は移動動詞のみに見られるわけではない。

(9) a. He gave her a present.

b. 彼は彼女にプレゼントを与えた。

c. 彼は彼女にプレゼントをあげた。／彼女は彼にプレゼントをもらった。

(9)の授受動詞においても(7)と同様の傾向が見られ、(9b)は翻訳調で「ごちないの」に対し、(9c)のように、「彼」か「彼女」のどちらかの視点に立って表現する方が明らかに自然な表現となる。

以上のことを、図1にあるgoの意味構造と関連させると、「行く」とgoの基本的な意味構造は同じであるが、第1属性と第2属性の結合強度において違いがあると考えられる。つまり、「行く」の方が「話し手から離れる」という意味合いがgoよりも強いので、相対的に第1属性の結合強度が高いと言えることができる。これは森田(2002:234)の主張と整合する。

日本語では「子どもが向こうに走る」「こちらに向かって走る」のような言い方をしない。必ず「走って行く」「走って来る」と「行く／来る」を用いて、話者の視点との位置関係および方向性を“己の認識”として表現を構成する。人間を離れて叙述することは日本語の発想の放棄につながるのである。

ここで言う「話者の視点との位置関係および方向性」は第1属性とほぼ同義である。したがって、「行く」の意味構造は図3のようになる。

このようにgoと「行く」の基本的意味構造を変えずに、第1属性と第2属性の相対的な結合強度の違いによって、意味の差を記述することができる。

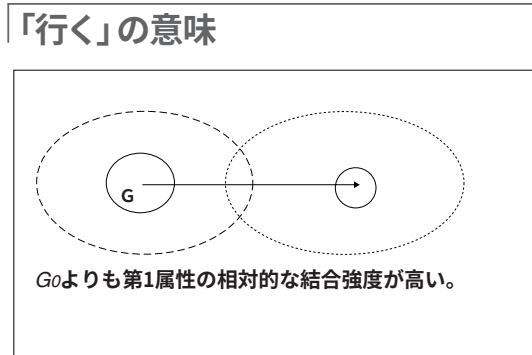


図3

また、なぜこのような結合強度の違いが発生するのかに関しては、最近よく議論されている「(事態) 把握 (construal)」の観点から説明できる。池上 (2007: 1) は、人間がある現象を言語化する際の、その基となる事態把握の仕方に関して、大きく 2 つに分けている。

(10) 主観的把握：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

客観的把握：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。

ここでは詳細に検討できない⁵⁾が、日本語は主観的把握を好み、英語は客観的把握を好む傾向がある。これは、先ほど取り上げた森田 (2002) の引用とも合致する。これを踏まえて、第 1 属性と第 2 属性について考えてみよう。

主観的把握では、話し手 (グラウンド) からの視点が重視される。つまり、「(何かが) 話し手の領域から離れていく」という第 1 属性に重きが置かれ、それに応じて第 2 属性の重みが下がる (図 4)。したがって、「行く」は go よ

主観的把握

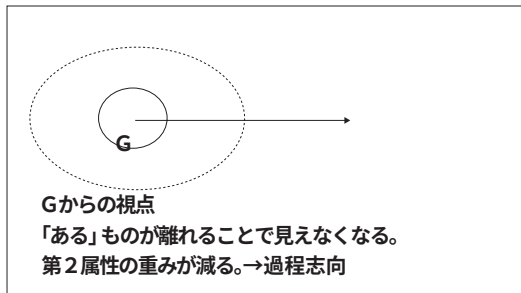


図 4

5) 出原 (2008a), 池上 (2006), 中村 (2004) などを参照のこと。

客観的把握

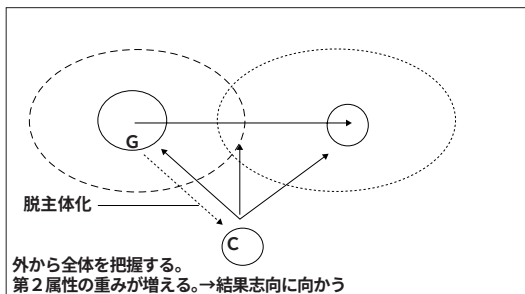


図5

りも第1属性の結合強度が相対的に高くなると説明できる。さらにこの結果、到達点が背景化されるので、結果を含意しない過程志向が生まれると考えられる。

それに対し客観的把握では、話し手は事態の中から抜け出して、外部から全体を把握しようとする(図5)。すると、概念化者(c)の視点の中に到達点も入るため、第2属性の重みが増え、それに応じて結果志向となりやすくなると考えられる。このことは、goには(5a, b)のように、状態変化もしくは結果状態を表す、生産的な構文があるのに対し、「行く」には同様な意味を表す構文がないことの説明にもなるだろう。この現象はさらに興味深い点があるので、次でより詳細に論じたい。

3.2 「良いことは自分の領域」

上で見たように、goには「行く」にはない構文がある。後に形容詞や過去分詞などを取ることで、「～になる」(5a)「～である」(5b)という意味になるものである((5)を再掲)。

(5) a. go bad, go bankrupt, go blind, go mad, go sour

b. go armed, go hungry, go in rags, go naked, go thirsty

これは英語の結果志向が一因と考えられるが、実はそれだけでは説明のつかない興味深い点がある。それは、よく言われていることだが、結果的にどのような状態になって（であって）もよいわけではなく、一般的に見て正常でない（悪い）状態になる（である）場合に基本的に用いられるということである。それは Hofmann and Kageyama (1986 : 45) が指摘している (11) の事例でも確認できる。

- (11) a. The patient's temperature went up today.
 b. The patient's temperature came down today.
 c. The patient's temperature went down today.
 d. The patient's temperature came up today.

(11) はいずれも患者の体温の変化を述べているが、体温が上がるか下がるかに関係なく、go を用いた (11a, c) では平熱から離れていく（悪化する）事態が述べられているのに対し、come を用いた (11b, d) では、平熱に近づいている（回復する）事態が述べられている。

go の意味構造から考えれば、このことは、英語では「良いこと（普通の状態）は自分の領域」, 「悪いこと（普通でない状態）は他の領域」という発想が言語に強く反映していると言えるだろう。日本語でもこのような発想が全くないわけではないが⁶⁾、語彙的・構文的にそれほど定着しているわけではない。その証拠に、(5) を「行く」を使って和訳することはできない。

- (12) *「悪く、破産に、盲目に、おかしく、すっばく」行く

日本語では中立的に「なる」を用いるのが普通である。この違いはどこから出てくるのであろうか？

6) 口語的な表現として、ある人が普通でないことを言うのに、「あの人はいっちゃっている」などと表現することは可能であるが、英語のように生産的に用いられることはない。

この問いに対し、本稿では認知心理学で論じられる「自己高揚動機」「ポジティブ・イリュージョン」という概念を用いて説明を試みたい⁷⁾。

人は自分自身や将来に対してある程度楽観視しないと、健康的で安定した生活を送ることが困難になる。実際以上に自分の価値や自尊心を高め、逆に自分に対し自信をなくさせるような情報を避けるという傾向を持つということは、進化論的にも十分理解できる。これを認知心理学では「自己高揚動機」と呼んでいる。

自己高揚動機によって、人は、いわば自分自身に対してある種の幻想を見せることになる。これが「ポジティブ・イリュージョン」と言われるもので、これは大きく分けて3種類ある。

- ① 自分自身を現実以上にポジティブにとらえること
- ② 自分が外界に及ぼすコントロール力を、現実以上に大きいと考えること
- ③ 自分の将来に対する非現実的な楽観主義を持つこと

(菊池2008：89)

本稿で関連するのは①である。この「幻想」により、人は実際よりも高く自分の能力を見積もることになる。例えば、欧米の多くの研究によれば⁸⁾、「〇〇の能力について、あなたは平均より上ですか、下ですか？」という質問をされると、実際にはありえないことに、「平均より上」と答える人が半数を大きく上回る結果が出ている。これは「平均以上効果(レイク・ウォービゴン効果)」と呼ばれているが、このような「幻想」が「良いこと(普通の状態)⁹⁾は自分の領域」、「悪いこと(普通でない状態)は他の領域」という発想につながっていると考えることは可能である。

7) 以下で行なう認知心理学に関する説明は、菊池(2008)を参考にした。

8) Gilovich(1991)、モッテルリーニ(2008)、外山・桜井(2001)、などで概観できる。

9) ここで言う「普通の状態」とは、悪い意味での「異常」と対比される概念であり、「平凡」といった悪い意味ではない。例えば、「ボロを着ていたり、何も着ていないのではなく、(きちんとした)服を着ている状態」など。

さらに、興味深いことに、ポジティブ・イリュージョンの表出の仕方は普遍的ではなく、文化間に差があるようである。

欧米文化間で行われた研究と、日本で行われた研究を比較すると実に興味深いことが明らかにされました。日本人を対象とした多くの研究では、こうした平均以上効果のようなポジティブ・イリュージョンはあまり見られないのです。そのみか、かえって自分の能力を実際よりも劣ったものだと回答するネガティブ・イリュージョン（自己卑下傾向）すら認められました。なぜなのでしょう？

文化心理学では、日本の自己観や社会観が、相互協調性を大切にするという特徴を持つことが、こうした違いを生み出していると考えます。つまり、日本人（や東アジアの文化圏）は他人との関係性を大事にし、相互に依存・共感しあって社会を形作っています。そのために、自己の能力の高さを誇るよりも、謙遜し自己批判する人間の方が社会的にも望ましい人間像ととらえられるのです。ですから、日本人はそうした文化の中で自己卑下的であることが習い性になったともいえます。（菊池2008：132-133）

この引用によれば、日本文化では少なくとも表立って自分が「平均より上」であることを示すことを避ける傾向にある¹⁰⁾。日米の高校生を対象にした調査結果（表1）もそのことを示している。「私は他人に劣らず価値のある人間である。」「私は人並みの能力がある。」といった、自己の能力を高く評価しているかを問う質問に対して、アメリカ人の90%近くが肯定的回答をしている一方で、日本人ではその割合は40%を切っている。逆に、「自分にはあまり誇りに思えるようなことはない。」という自己卑下的な質問に対して、日本人は半数以上が肯定的回答をしているにもかかわらず、アメリカ人でその回答をしたのは4分の1にも満たない。

以上をまとめると、「自分は普通以上」であると考え、またそれを対外的に示すことに抵抗が低いというアメリカの文化的傾向と、goの意味に現れている「良いこと（普通の状態）は自分の領域」・「悪いこと（普通でない状態）は

10) もちろん、日本人に自己高揚動機がないわけではない。自己卑下しても、それを相手に否定されることで、間接的に自己高揚動機を満たしているとも考えられる。（菊池2008：133）

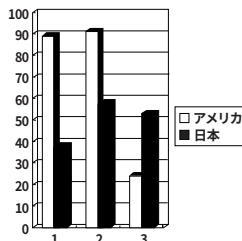
表 1

日米の自尊感情の違い(肯定的回答の割合：菊池 2008：137から引用)

1.私は他人に劣らず価値のある人間である。

2.私は人並みの能力がある。

3.自分にはあまり誇りに思えるようなことはない。



他の領域」という発想は矛盾しないものと言えるだろう。それに対して、自己高揚動機をあまり表面化させないという日本の文化的傾向と、「行く」に「正常でない(悪い)状態になる(である)」という意味が現れにくいことに相関関係があると考えるのが自然であろう。したがって、ポジティブ・イリュージョンがなぜ起こるかということと、基本的な移動動詞に「正常でない(悪い)状態になる(である)」という意味がなぜ発現するのかということには共通の原因、つまり自己高揚動機を対外的にどのように表現するかという文化的傾向が関与していると考えられる。もちろんこれだけのデータで結論を出すには早すぎることは認めざるをえず、他の言語でも検証する必要があるだろうが、4章で詳しく述べるように、ポジティブ・イリュージョンも文化と言語の相同性を示す可能性があることをここでは指摘しておきたい。

4. まとめと展望

本稿の目的は次の2点であった。

1. go と「行く」の対照研究から、日英語の志向性の発生源を探る。
2. MAM では、志向性の差も明示できる。

まず1についてであるが、この非常に似た意味を持つ2つの語であっても、一般的に言われている日本語の過程志向性と英語の結果志向性が現れていることを確認した。両言語のあらゆるレベルで全般的に見られるこの志向性に関しては、3.1で確認したように、事態をどのような視点から把握するかという仕方（主観的把握と客観的把握）が、その発生源であると考えられる。これは中村(2004)などの、志向性と解釈の関係に関する指摘と一致する結論である。

また3.2では、goにはあり「行く」にはない意味である「正常でない（悪い）状態になる（である）」に関して、その原因を自己高揚動機、及びその発現の仕方における文化的傾向に求めた。これらの概念は、今のところ言語学ではあまり取り上げられていないが、他の言語レベル・言語現象にも志向性として反映されている可能性は十分にある。1つ考えられるのが、ポライトネスとの関連である¹¹⁾。

独立の願望と連帯の願望は基本的にはどの文化に属する人でも持っていると考えてよいだろう。しかし、同じような状況でもある文化においてはどちらか一方が強く働いたり、文化によってそれぞれの願望の現れかたが異なっているという事例が数多く報告されている。

（井上1999：103）

過度な一般化であることを承知で言えば、英語では互いの連帯の願望を重視することが多い場面であっても、日本語では比較的独立の願望を重視することが少なくない、ということはよく指摘される¹²⁾が、これは自己高揚動機の発現傾向とパラレルであると考えられる。語彙レベルにおいて日本語に尊敬語・謙譲語が存在することも、自己卑下傾向があつてこそだとも言えそうだ。これらの点はもちろんまだ考察不足だが、今後の研究課題として指摘しておきたい。

11) 井上逸兵氏（慶應義塾大学）との個人的談話の中で指摘された。

12) 例えば、「英米の文化ではそれほど親しくなくてもしばしば対等であろうとすることが丁寧だと考えられるようである。日本の飲食店では「お客様は神様」だが、英米やその他のヨーロッパの国ではウェイター、ウェイトレスにも対等の人間として振る舞おうとする傾向がある。」（井上1999：108）

そして2については、3.1で示したように、MAMでは第1属性と第2属性の結合強度を変えるという操作により、把握の仕方の違いを表現することができる。これは、従来から行なわれている放射状カテゴリーに基づく記述法では表現することはかなり困難であるので、この点においてもMAMの有効性を示すことができた。

参考文献

- Gilovich, T. 1991. *How We Know What Isn't So*. The Free Press.
- 花崎美紀. 2008. 「言語と文化の相同性」. 唐須編 (2008) pp. 21-36.
- Hofmann, Th. R. and T. Kageyama, 1986. *10 Voyages in the Realms of Meaning*. Kurosio-shuppan.
- 出原健一. 2007. 「Goの意味論」. 『認知言語学論考 No. 6』. ひつじ書房.
- . 2008a. 「言語とアフォーダンス」. 唐須編 (2008) pp. 83-102.
- . 2008b. 「「志向」はどこから来るか—Goと「行く」の事例—」. 日本言語学会第137回大会予稿集 (金沢大学).
- 井上逸兵. 1999. 『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』. 南雲堂.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』. 大修館書店.
- . 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』. NHK ブックス.
- . 2007. 「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」. 東京言語研究所主催『特別講座 in 札幌』講演ハンドアウト (2007年5月27日).
- 菊池聡. 2008. 『「自分だまし」の心理学』. 祥伝社新書.
- 森田良行. 2002. 『日本語文法の発想』. ひつじ書房.
- モッテルリーニ, マッテオ (泉典子 訳). 2008. 『経済は感情で動く』. 紀伊国屋書店.
- 中村芳久 編. 2004. 『認知文法論Ⅱ』. 大修館書店.
- 中澤恒子. 2008. 「“come”が「来る」でないとき」. 『こころと言葉』(長谷川寿一・C. ラマー・伊藤たかね 編). pp. 113-127.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』. 研究社出版.
- 唐須教光 編. 2008. 『開放系言語学への招待』. 慶応義塾大学出版会.
- 上原聡. 2001. 「言語の主観性に関する認知類型論的一考察」. 『日本認知言語学会論文集』第1巻.
- ウィズダム英和辞典 第1版
- ジーニアス英和辞典 第3版
- Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners. 3rd Edition.

Longman Dictionary of Contemporary English. 3rd Edition.